

# 明石秋室の詩・書・人物について(五)

狩 生 熊 義

(賛助会員・佐伯市戸穴)

既に詩・書について詳述したのでその大部は尽した訳であるが、その補遺を兼ねて、人柄の一端を窺って見たい。

『秋室遺稿』や『大分県偉人伝』等で紹介された性格は沈毅寡欲、超然として時流におもねらず、公務退出の後は静坐して巻を繙き賦詩の外は俗事に関せずという超俗な点あり、書を求める者があっても応ぜず、断る理由は天帝に奉るといので奇人扱いされるに至ったという——従って零紙断簡も稀少価値から争い珍重されたという。——之亦奇人たる理由にされた——何とも変な循環現象で誤解されて了ったようである。

本人が別に異議苦情の申し出をした訳ではないからその儘でもよいが、これを調査した者としてはその冤を雪ぐ責任を感じるのである。

沈毅寡欲、時流におもねらず——という迄は先づ間違

いなしとしておこう。公務退出の後は静坐して禅の如く、巻を繙き賦詩の外は俗事を省みず、ということが誤伝の始まりで——公務の外には外出せず——という事になり、よほど変屈な臍曲りという感じを抱かせて奇行があるので随分奇人だということになり、誰か一人ひそかに陰口に奇人だよということ、成程それなら奇人だと次々に評判が広がる——悪事でなくても陰口などというものは案外早く広がるものだ。

人間には渡さぬ、天帝に奉るのだと云ったそうだと云えば、成程それは吉四六さんくらいの変わり者だということになる。

成程俗事雑事に関わらず勉強ばかりする人といえども今でも変つてるといふことになるかも知れない。——だがそれは俗流の考え方からすればという条件付きである。

寡欲な秋室はその書がいくばくの収入になるといふことは考えない。只一筋に李賀の研究追隨に没頭していた訳であり、人間離れた李賀の性格が自ら自分の性格の一部になりつつあった訳であるから、秀才李賀の姿をそのまま自分の姿と置き換えられる状態になりつつあったと云える。——苦吟行と題して二首

誰か憐む窮巷の老詩仙

眉に皺し膝を揺がせて佳句に耽る

家徒らに四壁塞く蕭然

肺肝より呟出し長く自ら苦しむ

千章も直せず一文銭

意に底事ぞ昔より鬼神は才子を忌む

(「苦吟行」の一部)

などというあたりは李賀の事より自分の事を賦しているといった方が適当なほどで、「滿眼悠悠皆俗客、心事平生誰に向つてか道はん」というのも李賀の心境というより秋室自身の心情であろう。

さらに

言うを休めよ天下知己無しと

子今我を知り、我は子を知る

叢桂園中文字の飲

醉眼相看て意気有るなり(「苦吟行」の一部)

というあたりまでは李賀に呼びかけた秋室のつぶやきかと思つて読んでも不思議はない。その次に漸く「莫逆誰か追う孟と韓」という語が出て始めて、あゝこれは韓愈とその友人孟東野の事かと気が付くのがやっとなつて感じであるが、その次を見れば又茫然として何れが何れともいえなくなる。

願わくは子は龍となり我は雲と作らん

萍跡飄々として東復た西

相逢うて安んぞ相離るるを得んや

(「苦吟行」の一部)

韓孟の交友の深さを示すつもりだろうが、自分と李賀の心情をそのまゝ表現しているのである。

「我は慕う李王孫、才に驚く等倫無きを」とか「一生蘭を慕う誰か我と同じき」とか真底から心酔している相手は只李賀のみ、という心情に至っては他人は愚か家族よりも好きなのだという気持であろう。或は蘭に或は蘭にたとえてその才能の天才振りを賞嘆しつつ余りにも勝れたるが故に、若年にして天帝に召されて白玉楼中に入

るというに至ってはロマンに満ちた物語——かぐや姫の竹取物語にも匹敵しており、或はポートルールの『悪の華』やヴェルレーヌのロマンの花と比べたくなるのは、近頃の英国女流詩人の新発見を待たずとも共鳴を称えなくなるのは当然ではあるまいか。

近頃の李賀の研究者はそれほど世界の各地に増している——日本の研究者で李賀の作品中に三人の李賀が居るということを言いだした人がある。一人は鬼才と称された李長吉、つまり我々の李賀である。次の一人は同時代にいた「李賀長吉」という人、更に次の一人はやはり同時代にいた「李長吉」という人であるというのである。李長吉が三人も存在したことから来るさまざまな混乱を一つずつ解明してゆく謎とときのような緊張を伴った綿密な考証をしてゆく。その過程で齊藤博士の注の誤りを、王琦の解の誤りを、陳弘治の誤りを指摘して行くというのであるから驚きの目を瞠るのだが、それがナント、九大の上尾助教授の発表による「原田憲雄氏の李賀論文」という題名——『中国文学論集』第三号——である。

その原田氏とは京都女子大の教授で日本における現代の李賀研究の第一人者なのである。

この人ほど李賀研究の論文を多く発表している学者は恐らく日本いや世界中に居まいと思われている人だからことは簡単ではない。

中学二年で李賀を知った原田氏が三十年間李賀研究に打ち込み昭和二十八年から四十五年迄に三十七種の李賀研究を発表していることを調べた上尾助教授が、責任を持って発表されているのだから間違いではありえない——。然し秋室の李賀研究を御覧になったら何と仰せられるだろう。——この秋室の李賀研究を是非原田先生に紹介してくれと上尾助教授から依頼があったのだが、資料が多過ぎて整理が出来ないのでその段階に至っていない。

——話は横道にそれたが、私が言いたいのには秋室自身が李賀の分身のようになり、李賀の考え方が秋室の考え方に重なって、二人李賀となり二人秋室となって来たのではないかということである。それ程李賀の性格は秋室の性格に移り変って来たようである。

佐伯を代表するもう一人の儒者中島子玉も李賀研究に没頭している。同じ佐伯で、しかも秋室の紹介で咸宜園に入門して広瀬淡窓塾の逸才となり、頼山陽にも淡窓から紹介されて、その連なりは深い人脈を成したのである

が、最初の李賀とのかゝわりは秋室であろうという事は否定し得ない。最後は恐らく山陽の連なりから、清朝愈樾えうの詩選にまで山陽と並び載せられた子玉の詩は李賀風で注目されている。

逆に子玉の影響から山陽が李賀に注目したか、山陽にも李長吉の体に倣なまうという詩があり、晩年咯血の時には李賀の様だと知人に手紙を書いていたりするのは、如何にも李賀という人の影響力の大きさを物語っていると思ふ。

### 秋室の家庭

順序が前後したが、秋室は杵築松平侯家中豊田八蔵當英の次男として生まれ、少年期を三浦黄鶴、矢野毅卿に学び、日田咸宜園に客分として学び三句にして帰ったが、佐伯明石家に嗣無く婿養子として来た。明石家というのが歴代養子が多く、養父も実は秋山家から来た人で、その長子は江戸で没し、次子も相次いで没し、娘二人あり、その長女満寿を妻として入婿したのが文化十二年九月で、二十三才の時である。日田咸宜園に行った時からはずうど三年後である。翌十三年五月初めて毛利侯に出仕し、

七月には学問の志厚く格別に御蔵書拜見勝手に致す可き旨許されたのに、家庭的には恵まれない方で九月妻子とも死去という不幸に遇い、その翌々年二女と再婚したのに七年後に又死去、その翌年山中家より再再婚の妻を迎えるという悲境にあった。そして子供も早世して、秋室の後を継いだ六代目の琢磨氏も養子という家系である。

これは明石家に在る家系図による——秋室自筆のものもある。三種の家系図から共通して見られるものだから正確だと思ふが、この中に秋室が豊田家から来る時には、松平侯御家中中根太仲の弟としてあるのは事実であるがこれは前々回に詳説したので省略する。

この中で再度確認したいのが、書物奉行になったのは五月に初出仕した文化十三年の十二月九日付で書物奉行仰せ付けられている——ということである。二十四才の青年奉行である。

同じ十三年の三月に中島子玉と古田豪作という二人を日田咸宜園に紹介している。

これが少々不思議である。前年九月に佐伯に来たのに翌年五月十一日初出仕とは、一体その間に何をしていたのだろう。七ヶ月余りも何もせず徒食していたことにな

る。

初出仕して二ヶ月足らずで嶮然頭角を現わしか学問所出仕を命ぜられ、同時に若年者学問引立を仰せ付かり、更に二ヶ月後九月には御蔵書勝手拜見を仰せ付かり、その年十二月には待望の書物奉行を仰せ付かるという順風満帆日当りの良い出世コースを直進中に家庭の不幸を経験している。

中島子玉と古田豪作とはこの年の三月に咸宜園入門の紹介を秋室がしている。——ということが少々不審である。師弟の關係は無くとも幾何の關係が無ければ紹介はしないはず。

咸宜園は紹介者無くしては入門を許さなかったから、藩侯から入門を認められたので早速その経験ある秋室に依頼したということも考えられなくはないが……

これは後日の調査に譲ることとして秋室の日常の勤務状況について見たい。二十四才の青年書物奉行が天保四年五月まで十七年に及ぶ長期間に御小納戸御膳番を兼ね、四教堂出仕諸生引立（僅か一年半位）を兼務して、謹直な勤務振りであった。

それは若殿泰雲侯の教育掛とも云うべき任務であり、

ある時は素読講義を申し上げ、将来佐伯藩を背負う明君を養育せねばならぬという大任は二十九才から四十才に至る間の男盛りを打込んで御仕えた大任であった。

当時は今より更に率先躬行の模範となる人物でなければ人の師とはなれない時代だっただけに、大助の責任は重かった訳であり、これを完遂したというだけでも立派な学究の人格者であった。

佐伯文庫八万巻の図書を読破し整理した事は大学者の素質充分だが、その間に二万餘巻の献上書の選出・整理をした大事業は大助ならではの出来ない仕事であった。この大事業に着手する直前が最も勉強し新研究の進んでいた頃で三十才——三十二才の間である。

この間における李賀研究は猛烈を極めたもので、その当時の記録を見るとその識見と努力とには誰でも頭が下がるのである。

家庭内人倫の不幸に加えて父条左衛門が御役御免になったのが彼の二十七才、従って新道通から屋敷替になったのが三十才、父条左衛門が死去したのが三十九才、これでも屈せず精励恪勤御奉公大事に勤めて、四十一才御目付武具奉行を拝命する迄の書物奉行勤務は、適材適所

であるとともに自分の納得のいく研究が出来たようである。これで書物奉行と学問教授の御役御免にはなつたが、引続き学問所（四教堂）には日々罷り出て諸事心を付けるようとの思召を受けている。その後、郡代町奉行となり、更に御郡代本役町奉行兼帯勤務を仰せ付かり、御取次格に昇格しているが、見習公事方兼務も精出して勤務し、稲毛検分現地調査にも若侍と同行して代官、他奉行と検分立会いの記録を残している。この記録など、公務日誌の模範とも云うべく、早朝から日没迄の記録精細を極め、達筆の即筆というべきものである。

その功績により拾石の御加増があり、これがそのまま六代琢磨氏の禄高として承継が続がれている。老年の故を以て郡代町奉行を致仕したのは文久二年八月、七十才の時、其の年十二月高謙公に拝謁して長生きするようにと温かい御言葉に感泣した。老臣、老儒の生涯であり、慶応元年十一月七十三才病を得て歿した輝かしい人生であつた。

重ねて云う。こんな赫々然たる業績と学問を究めた老学者、老忠臣が何の奇人ぞと。

### 学問的業績について

沈毅、寡欲、熟慮、慎重に処理した役所の仕事の合間にも、不断李賀の研究にはいささかもゆるみなかった。書物奉行、学問所教授を御免になり、武具奉行を仰せ付かったのが天保四年だが、天保六年には『玉楼鬼訂』という未定稿の詩集を出している。

郡代町奉行の第二席に居た天保十三年五十才の時に、『韓孟柳詩』を特輯している。彼の氣に入った詩を抜粋している。韓愈、孟東野、柳宗元を特に抜出している。

弘化元年——袁簡齋文抄

弘化二年——随園文抄三十種抄

弘化三年——丙午漫抄

嘉永二年——孟東野詩

嘉永六年——癸丑漫抄

安政二年——乙卯漫抄

安政三年——丙辰漫抄

安政四年——丁巳漫抄

安政六年——湘中草抄

等は著名な業績であろう。安政年間に至っては毎年のよ

うに引続いた労作である。

・前頁はおおむね後年の餘暇を得た時代のものであるが、  
壮年期最も多忙を極め、諸事、煩雑な家庭状況の時に、  
一段と輝かしい研究がなされているが、その一端は各時  
代別、李賀研究者の作品を挙げながらその解説をしてい  
る。

その時代別人名は次の通りである。

唐代——張碧、莊南傑、劉言史、李 沈四名

宋代——鄧登龍、沈原理？ 趙希拙、歐陽修、茫浚、春

臺仙 六名

元代——楊維禎（鐵崖）、宋鑿、岑安卿、小雲石海崖、

陳孚、甘泳、貢師泰、李貫適、于立、項炯、潘伯修、

王子熙、李序、馮子振、宋无、陳樵、李榕、謝應芳、

袁桷、張天英、張憲、汪克寬、韓性、顧瑛、顧仲瑛、

馬臻 二十七名

明代——王懌、徐渭、陶望齡、張綱孫、顧超、王象春、

曹臣、董說、沈明臣、汪巽元、何景門、劉基、韓曾

駒、翁孺安、吳文泰、蘇平、沈愚、黃元祿、董斯張、

薛敬孟、徐延壽、楊文驄、沈承、戴良、劉仔肩、石

瑤、鐱漁、戈鏞、楊基、張羽、孫炎、宋濂、孟昉、

袁孝、陳基、鐱崧、王彝、樊阜、園宗、張和、劉溥、

高得暘、唐之濼、趙宜生、張琛、蘇福、史鑑、何景

明、顧璘、楊應詔、李雲龍、王世貞、葉大叔、陳价

夫、陳汝修、郭正城、朱純、王隧、貝瓊、徐燧、何

白、周之夔、雀桐、徐貴、林敏、陳全、高啓、湯顯

祖、袁宏道、李暉、周玄、嬰佑、李德、樊甫、張和、

姚廣孝、蘇平、陸德蘊、鐱績、張泰、李夢陽、王廷

相、楊慎、劉黃裳、沈懷祖、趙貞吉、陳衍、陳薦夫、

陳鴻、鄧迪光 九十名

此の外時代末詳——翁吉燦、馮班、陶崇政、倪元路、王

膺、沈自然、唐肅、王行、陶宗儀、鐱炳、湯伝盤、

張明弼、袁宏道、沈周、鄒亮、沈愚、忱恒、陳子龍、

吳棋 一九名

清代——王季重、王思任 二名

以上百四十八名の中七十五名が、『錦囊遺彩』丙集の

中に出る人々である。

尚ここでもう一度、『錦囊遺彩』は丙集のみが現存し  
ているが、他の三集は甲・乙・丁とあることを推定する  
証拠として「自序」の中に改めて四篇となすと明記した  
部分が発見されたので、他の甲・乙・丁の三集を捜し求

めていることを再録して発見された方は是非ご教示頂きたい——重ねてお願い致します。

次に以上の諸氏を何から抽出したかの出典を左に列記します。

全唐詩、全唐詩補遺、五峰集、宋詩鈔、燕石集、藤洲  
統集、海栗集、汲古堂集、十二代詩選、廷璧集、昌谷  
遺範、竹坪詩範、學古集、安雅堂集、列朝詩集、耳立  
集、會稽外史集、(元)百家詩選、履道荆南倡和集、  
明詩歸、東溪集、還山導壩、青風臺集、玉山璞藁、剛中  
玉堂集、皇朝詩選、石渠居士集、甲集、貞素齋集、酸  
齊集、玉山名勝集、林外野宮、徐文長文集、古學蓂蘭、  
彦威集、晞髮集、雞韶集、前非賞藁、逃虛子詩集、江楹  
集、揚州府志、五氏家藏集、楊升菴文集、思古堂集、  
天遊山人集、玉芝堂談薈、百家詩存、鉄崖先生楽府、  
鉄崖先生楽府補、蔵徴館集、羅浮山志會編、書事文類  
聚、嘉定県志、趙文肅公集、崇禎八大家詩選、甬上著  
舊詩、即山集、摧僂小品、大江集、鈍吟集、閩詩傳、  
野絃閣集、水明樓集、倪文正公遺稿、黃離草、寸碧堂  
集、始青閣稿、過日集、靈巖記略、明詩綜、繫鉄集、  
国朝詩別裁集、沈氏詩録、文献通考、東観餘論、昌谷

### 詩集、唐音類選。

以上計七十八種の諸書の中から前述諸氏の詩文を抽出した訳であるが、数千巻の大量なものである。秋室蔵書以外のものは佐伯文庫の蔵書の中から学び得たものに違いない。勿論これは詩に関するものだけであり、特に李賀に關係する後世詩人の作を抽出したのであるから、その読書量は驚嘆の外はない。殊に『文献通考』の李賀篇が五巻あるが、これが大いに資料として活用されたようである。

また二万巻の幕府への献書目録の中にも右の書目と同一のものがあるから、それらのものは三十才前後の書物奉行の時の勉学に熱中していた頃の愛読書であつたものであろう。

### 画及び他の分野について

詩、書、人物に限定したはずであつたが、これ以外の姿は無かつたかというと決してそうではない。天下に通ずるものは詩人として知られるが、書は知られざる大家という意味で紹介した。画はその次であらう。然しこれも作品はあまり多くは残っていないが、谷文晁の門人錦木雲潭たんに学んだというので、『大分県画人伝』にも出て



いる画人である。特に竹を愛して多く竹を画いている。「夏竿比玉」と題して威勢のよい風竹を濃淡墨で画いている。

篁居生と自称して竹を多く画き、或は「竹香中大助」と自署しているあたり竹に非常な愛着を感じている。

勿論その他の画題も画いている、山水、石と人物——猪串浦に漂流した中国人を吟味に行った時の人物画がある。

中国明代の新傾向として出た三絶と称する詩書画一体観というか一幅の中に三者の調和を求めた文人の一端として秋室も三者に取組んだものだろうと思う。

単独の画もあるが、三者の調和を前提にすれば一層新しい珍しい境地が生まれる。

これを探究するのは新美の発見を使命とする芸術の当然の姿である。それが現代の芸術感覚から見ても卓越しているというのは不朽の価値を持っている証拠である。

### 豊後国の文人特に秋室前後の人々と環境

豊後学なる独特の学問の有無は別として当時如何にも多くの学者文人が輩出している。『南豊名家詩選』や、

『大分県偉人伝』を見れば一目瞭然だが、郷土史的存在

でなく、大きく天下の学者、文人として著名だった人々と秋室の居た位置とが、どんなものであったかを一瞥しようと思う。

大先輩の三浦梅園は寛政元年没だから秋室の生まれる前、蘭室は二十九才先輩だが同時代に生き、師の矢野穀卿は二十才先輩で、雲華上人も同年、竹田が十七才先輩、萬里が十六才先輩、淡窓は十二才先輩、角田九華は十才先輩であり、頼山陽は淡窓と萬里の間に位置している。

三年後輩には季鳳、八年後輩に子玉、竹溪、十四年後輩に旭莊、続いて橋門、梅外、五岳、東嶠、芳洲の四名は殆ど同年という順序で、前後に多く才子学者が沢山居る。

天明期に生まれた先輩と文化の初頃生まれた人々が、文化文政期に活躍した輝かしい歴史を展開している。

つまり大分県内で育つ者にとっては良師は、いくらでもあり、環境として立派な学問的雰囲気にあったということである。

生まれるべくして生まれ、育つべくして育った我が郷土先輩とその業績を探究して、その喜びを味わいながら今後の勉強を進めたいものだと思う。

(完)